

満州佐伯村遭難記

今山水男

(会員・本匠村堂の問)

(満州佐伯開拓団へ)

私は、昭和十八年三月、因尾小学校を卒業し、翌月八日青年学校に入学したその日から、村内の橋本玉喜氏経営の旭製箸工場へ日給一円三十銭の工員として入り、毎週一日だけ学校で軍事教育を受けました。ちなみに、そのころ米一俵(六〇キログラム)の値段は十八円でした。

暑い夏もようやく終わったかと思われる九月下旬、この地方は有史以来の集中豪雨に見舞われ、山は此処彼処で崩壊し、河川は氾濫して道路も鉄道もはずたに寸断され、私の村でも警防団員二人と、知人の一家五人が押し流されて死亡するという惨事が起きました。

戦時中のことでもあり、村民総動員で道路・水路・水田の復旧を急ぐとともに、当時トラックやバスなどの重要な燃料であった木炭の生産・搬出に連日駆り出されました。この過労のためか母ブンは病床に伏し、暮れも迫

った十二月三日ついに他界しました。まだ働き盛りの五十歳でした。

年が明けて三月、佐伯開拓団長矢野武吉氏が帰国し、佐伯村への参加を熱心に勧めたので意を決し、未知の異国満州へ移住することとしました。

四月二十日、父・姉・弟そして私の四人は因尾村から二十家族(うち単身者五人)の人達とともに、村長柳井勇氏の激励のあいさつを受け、村民多数の歓呼の声に送られて、永年住み慣れた故郷を後にしました。途中、大分駅で県南七カ村の人達と一緒に、総勢五十二家族百四十九人となり、大分県知事細田徳寿氏の激励を受けて出発。同夜関釜連絡船金剛丸に乗船し、アメリカ潜水艦の襲撃を警戒しながら、全員救命胴衣をつけて波荒ぶ玄界灘を渡りました。朝鮮半島を北上する途中、いっしょに因尾を出た老人一人が事故死するなどの不幸を乗り越え、一行は二十三日夜半、四平省(現在遼寧省)昌図県の佐伯開拓団に入植しました。

一戸当たり水田一町三反、畑七町五反の配分を受け、一望千里の大陸で希望も新たに畜力を主体とする新しい営農に努力しました。しかし、開拓といっても荒野の開

墾ではなく、これまで中国の農民が愛着をもって永年耕作して来た土地を、当時の拓務省が強制的に買収して住民を立ち退かせ、その後私たちを入れたもので、これが国策移民のやり方でした。

佐伯村は「桜桃村」という中国の村一つを買い取って、そこに建設が進められていたのです。

(敗戦を知る)

二十年の八月五日、突然「米軍が上海に上陸した」とのニュースが開拓地を流れ、大変なことが起こりそうだと不安でした。十日には「ソ連軍がソ満国境を全域で突破し、すでに五〇キロメートル以上侵入している」との緊迫した情報も入りました。

しかし八月十五日の敗戦も正しくは伝えられず、私は自宅のある龍昇部落から六キロメートルも離れた水田で草取りをしていました。その昼下がりのことです。南東方向の山口開拓団(山口県送出)の上空から赤い吹き流しを引いた日本軍の飛行機が、北西の広陵開拓団(広島県送出)方向に飛び去り、その機影が消えたとき、私は何だか不吉な予感しましたが、情報は入らず、二日後に敗戦を知りました。何かこのことと関係があったのでしょうか。

当時は百万の無敵の関東軍が存在すると伝えられていたので、まさか降伏するとは思ってもならず、まったく半信半疑でした。

これまで開拓団・報国農場を問わず十八歳以上の男子はことごとく召集を受け、残るのは老人婦女子ばかりとなり、広大な開拓地の治安維持は私たち十七歳以下の少年の手に委ねられることになりました。そこで団本部に備えられた非常用の銃を手に二人一組で十一の集落を巡視することになり、午前七時に本部を出発し日が暮れて暗闇のなかを午後八時・九時となって家に帰ることの繰



離脱直前の佐伯開拓団周辺図

■は共産八路軍 一は国民政府軍
佐伯開拓団は宝力鎮を避け東側の間路を通って直接昌図街に脱出した。

り返しです。家に帰っても夜は獵銃を頼みに地区ごとの警戒で、土匪の襲撃があれば狼煙をあげ、全地区に知らせて救援を求めることにしていました。地区周辺のコーリヤンは五〇里四方を刈り取り、異変がいち早く分かるようにしていました。

(友人との出会い)

九月に入ると、召集された人達が兵役解除で次々と帰団し始め非常に心強くなりました。そしてほどなく完全武装の日本軍兵士十人が、昌図の駐屯地から派遣されました。この地域にはソ連軍の進出が遅れ、まだしっかりと編成を保った日本軍がいたのです。

このとき新京師範学校に在学中であった友人の稗田照正君(十六歳)が突然避難してきました。同君の話によると、「開拓地は危険だ」という学友たちの忠告も聞かず、無謀にも単身難民列車で南下し、九月十日やっとの思いで昌図駅にたどり着き、居合わせた日本軍兵士に佐伯村への道筋を質したところ、「今から佐伯村へ向かうところだ。一緒に行こう」と、大砲のけん引車に引き上げ、「それにしてもよく無事でここまで来られたな」と言われ、うれし涙を流したとのことでした。

昌図駅・昌図県城・宝力鎮・山口開拓団と五六キロの道をたどって佐伯開拓団の親戚に迎えられ、七カ月ぶりに生きて再会できたことを喜び合いました。彼が学校の春休みに一度この地を訪れていたことがこの決断をさせたのだと思います。

彼に新京の状況を聞きますと、「進攻したソ連軍は在留日本人に軍役を強制し、所かまわず婦女暴行の限りを尽くし、また戦利品と称して金品を強奪し、そのうえ武装解除された日本軍兵士は、捕虜として続々シベリアに送られている」とのことで、佐伯村でもこの成り行きにひどく不安を感じました。

(家族の死)

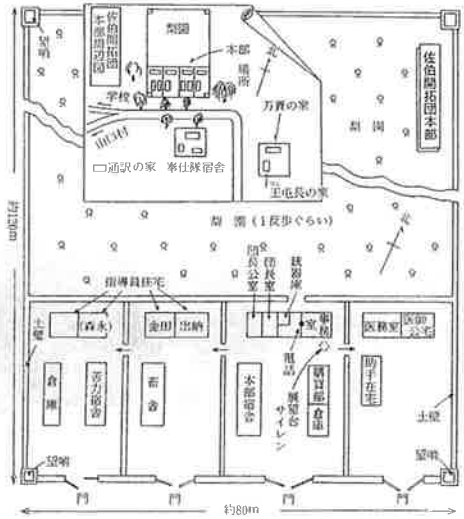
警備の日本軍兵士は二週間滞在したのみで、ソ連軍の武装解除を受けるため昌図に引き上げました。それから急速に治安が悪化して日本軍に代わり中国側の手で治安維持隊が発足し、団や団員の所持していた銃刀類はすべて没収され、私たちは自衛の手段を失ってしまいました。やがて多数の土匪たちが各地の集落を襲いはじめ、銃弾に斃れる人やケガ人が続出しました。このため全員着のみ着のまま国民学校と団本部に集結し、三日間は一

蒸しジャガイモ三個で飢えをしのぎ、厳しい寒さと眠られぬ夜のため、生と死の境をさまよう生活が始まりました。

私の父源三郎は働き盛りの五十歳で昨年(昭・十九)十二月に死亡、そのあと病床に伏した姉ケサオも、今年(昭・二十)の始め望郷の念に駆られながら二十歳で他界、そして難民生活中の十月十三日、赤い夕日が地平線に沈む頃、弟柚一も僅か十五歳で夭折しました。大陸に新しい幸せを求めた私達一家は、限りなく非情な天を恨みながらもむなく異国の土と化して行つたのです。なんという悲しい運命でしょうか。私は前途の希望をことごとく失ってしまいました。

(治安の混乱)

当時、私は本部集団の連絡員として同じ任務の稗田君とともに診療所の一室に起居し、かたわら診療の手伝いもしていました。共産軍の治下に入ると、「日僑も中国人も平等である」との方針に従って食糧が保証されることになりました。私は、共産軍の「食糧供給証明書」をもらい女の人を大勢連れて、たびたび中国人の部落へコピーランを受け取りに行きました。このころから団の本



佐伯開拓団本部図

敗戦後筆者は東側の一画、助手住宅に収容されていた。

部に備蓄した食糧は底を尽いていましたので、規律正しい八路軍(共産軍の中核)の行為には深く感謝しました。その頃治安も少しは良くなったので、団長は森脇弁市校長古田勝教頭と相談して、子供達に学習を始めさせました。稗田君も師範学校出身なので教鞭を執り、子供達に若い先生だと親しまれていました。

一方苦しい難民生活の中で、とかく荒みがちな人々の心を癒すため、これも団長の提案で短歌・俳句・川柳の

愛好会も発足しました。本部裏の一町歩もある広い梨畑がすっかり霧氷にくるまれていた様を見て、

「古里の桜とまがう霧氷かな」

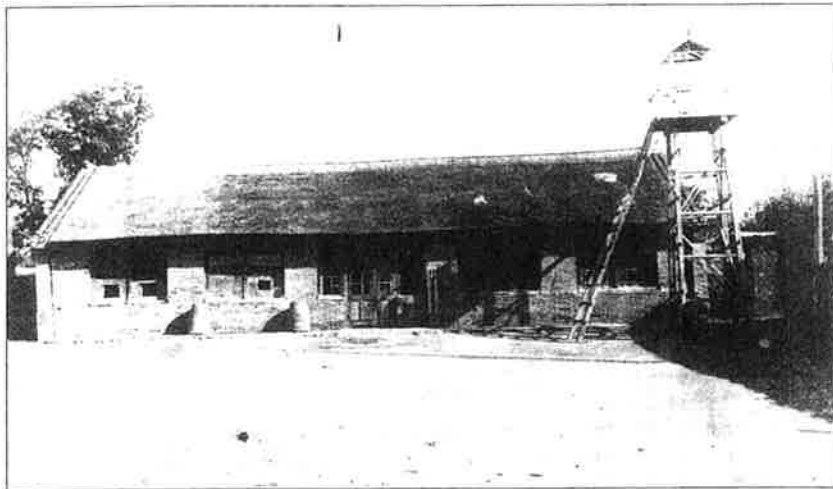
と読んだ矢野武吉団長の句が、今も懐かしく思い出されてなりません。

(再び苦難の生活へ)

八路軍も良いことばかりとは言えません。団の周辺ではまだ国・共(国府軍・共産軍)の内戦が続いていました。

暮れも押し迫った十二月二十九日、診療所の金沢恵一郎医師と矢野文郎助手が徴用され、器材も医薬品もすべて持ち去られました。そのあと今度は青年男女四十人が抽選で徴用され、その中には稗田君もいましたが友人を病気に仕立て、看護する振りをしてうまく逃げ帰り、その後二十七人が脱走して来ましたが、残りの人達はついに消息を絶ってしまいました。

医師の欠けた診療所は、長野県松代町出身の看護婦鶴田梅子さんが病氣治療に携わり、第二集団のいる学校までは一キロ以上もありましたが、夜間のお産でも愚痴ひとつこぼさず走って行きました。私は護衛のため手槍をもって毎回同行しましたが、「ほんとうに偉大な奉仕者



佐伯開拓団本部

だ」と思いました。

そのころの日常生活は午前七時起床、八時朝食、九時本部前集合、点呼、訓示のあと、健康な人達は炊事や燃料採取の使役に出ます。零下二十五度の厳寒に耐えて生き抜くためには暖房は欠かせませんので、治安の悪い隣村の近くまで護身用の手槍を持ち、必死の思いで毎日ヨモギの枯れ草を刈りに行きました。

(中国人の農家へ)

年が明けて二月、八路軍は団長を連行して宝刀鎮の獄舎に監禁しました。大変なことが起きたと心配しましたが、幸い二週間で釈放され全員愁眉を開きました。

四月下旬ようやく凍る大地が解けはじめ、立場が逆転して今度は私たちが中国人の畑で働くようになりました。どれだけの賃金であったかは忘れましたが、昼に出された温かい粟餅の、そのおいしかったことは今も忘れられません。

中国人の畑で働きながら眺める風景はまことに空しいものでした。かつて、学校の裏の広い土地には佐伯神社の神殿があり、青年学校当時はいつも皇軍の武運長久と戦勝の祈願をしたものでしたが、いまは跡形もなく取り

壊され、本部との中ほどに設けられた共同墓地の赤いレンガの慰霊塔だけが、名残を留めるかのごとくひそかに突っ立っていました。大分県報国農場の隊員が前途を悲観して鉄砲自殺した場所でもあり、帰国のかなわぬ故人の冥福を祈りつつ黙々と作業を続けました。

(現地離脱)

五月二十日、とつぜん昌図の日本人会から蜜使が来て、「国府軍の方針で内地に帰還することになった。速やかに現地を離脱せよ」とのことでした。ところが、ここは共産軍の支配下昌図は国府軍の支配下で、脱出することは容易ではありません。団長は情勢を探るため団員二人を極秘に昌図に派遣しました。その二人が帰って来たのは二十四日の夜半でした。「間違いはない。三十日の列車に間に合うようすぐにここを離れるように」とのことです。団長は「万難を排し二十六日に離脱を執行する」と全員に告げました。

その出発の前日のことです。団長以下八人の幹部が共産軍に呼び出され、銃剣で残留を強要されました。しかし、団長以下の決意は変わらず、ほどなく釈放されました。ところがその夜再び共産軍の兵士が来て、今度は金

田豊農事指導員を連れ出したかと思うと、やがて数発の銃声がしました。残留拒否への腹いせだったのでしようか。金田指導員は日本の中国侵略政策の一翼を担って、入り込んだ佐伯開拓団のその責任を一人で背負うかのごとく犠牲となりました。その非運を想いたただだ冥福を祈らずにはいられません。

雨のため出発が遅ると、往來では中国人の動きがにわかには慌ただしくなり、なぜか不気味な感じがしました。

五月二十八日午前六時本部前に全員集合し、団長の「五カ年の苦闘も空しく、いま多くの同志が眠るこの地を放棄し故国へ引き揚げの止むなきに至った。まさに痛恨の極みである：云々」との言葉に、全員が声を上げて泣きました。

老人や子供それに病人は馬車に乗せ、元気なものは槍を手にして警戒を厳重にしながら開拓地を離れました。途中暴民の襲撃を避けるため、朝霧の立ち込める間道をひそかに通り、無事脱出に成功しました。日頃から団長と親交のあった冬萬貴（トン・ワングイ）という中国人の誘導によるものでした。

その日は必死の思いで四〇キョウトルの道を歩き、県城の手

前で日が暮れました。男子が徹夜の警戒をする中、婦女子や老人はそのまま路傍に横たわり、寒さと不安の眠られぬ一夜を送りました。

夜明けを待つて再び隊列を組み、互いに励ましあいながら歩き始めました。既に国府軍支配下に入り治安も良いと思われたので、手前の橋の上で持っていた槍などを捨てました。県城の市街で青少年義勇隊の訓練所跡を見ましたが、人影ひとつ見えず、複雑な思いで通り過ぎました。

（錦州へ）

この日（五月二十九日）午前十一時ようやく昌図駅前

に到着しました。駅前には日本人会の人達が温かい食事を準備して待つていてくれました。

二日間の滞在中国府軍兵士に金品を奪われ、また農場の女子隊員が帰国を目前に病死するなど：悲しい出来事がありました。

翌三十一日、昌図に集合した日本人難民は四つの大隊に分けられ、一大隊千人ずつ乗車して南下を始めました。無蓋の貨物列車は昼夜を問わず寒風に吹きさらされ、そのうへ奉天の手前から冷たい雨が振りだし、ワラで作っ

た二重のカマスを頭に乘せ、体を寄せあつて寒さに耐えました。まるで豚の輸送を思わせる惨めな姿でした。走る列車からふと目にした光景は、鉄道沿線に設けられた国府軍のトーチカで、鉄条網の内側に柳の木柵を打ち込み、その内側に水を溜めた壕まである頑強な造りでした。雨が止み奉天の駅に半日ばかり停車し、見渡す限り線路ばかりの構内を横切り、駅舎までたどり着いてみると周囲に壊れた戦車や装甲車が、山積みとなつているのに驚きました。

三日後に列車は錦州駅に到着しました。鉄道線路は雨で水浸しとなり、駅の彼方此方に腐乱死体や白骨体が無数に散乱し、これも皆日本人の仏なのかと悲哀を感じましたが、家族や自分の身の守りに懸命で、だれ一人手を合わせる心の余裕はありませんでした。

錦州滞在の三日間は畳一枚に五人が寝起きする雑踏ぶりでした。滞在中私は国府軍の炊事の使役に出ていましたが、再度の使役要求で五十人が残されたまま、四日後錦州を後にしました。身動き一つできない窮屈さのまま、私たちの列車は一路コロ島を目指しました。

(ふたたび祖国へ)

六月六日朝、無事コロ島に到着し、アメリカ軍の検疫を受けた後、大型上陸用舟艇に乗船し帰国の途に就きました。ところが、気の緩みか航海中に三人も死者が出ました。死体を収めた柩は正装した船長や船員それに遺族の見守る中、ドラを鳴らしながら静かに海に投じられました。

六月十日船は佐世保に入港しましたが、現地で伝染病が発生しているとのことで、急ぎ博多に回航されました。ところが、何という不幸なことか船中で子供に伝染病が発生したのです。病気の子供はすぐ陸地の病院に移されましたが、残りのものは船中隔離として病気の終息まで丸一カ月間、沖に停泊を余儀なくされました。このとき二十数人の子供が薄幸の人生を終わりました。

(鎮魂の碑)

七月八日、思えば二年三カ月振りに祖国の土を踏みました。引揚援護局より乾パン一袋と食券三枚の給付を受け、診療所で苦楽を共にした長野県出身の鶴田夫妻とも別れ、博多駅から汽車に乗りそれぞれの故郷へと向かいました。

戦後五十年を過ぎた今でも、異国での体験は生涯忘れ

ることができません。

私は平成六年十二月、亡き父・姉・弟そして同じ郷土出身の現地召集で戦死された人、八路軍に徴用され不帰となった人、苛酷な残留生活の中で他界された人など、それぞれの名前を刻んだ慰霊碑を建立しました。碑文には当時を偲ぶ記録と、開拓地で死亡した同胞と日中永遠の平和を祈念する…と記しました。そして側面には、

今もなお、思いは馳せる大陸の、
赤い夕陽に、ろばの嘶き

と、私の思いを詩文に託しました。

苦難を共にした稗田氏はすでに他界され、長野県在住の鶴田夫妻とは今も交遊を続けています。

戦後私は北京放送で中国語の研鑽を重ね、翻訳・通訳の資格を得て県（大分県企画調整課）に登録し、現在社会教育の講座で中国語を教えたり、県内へ農業研修に来ている中国の若い人たちと交流を進めるなどしています。「日本人の本当の良さを中国の人達に理解してもらうため、終生努力を続けたい」と、そう強く願っております。

表紙写真解説

ときは井堤の記（町指定有形文化財）

弥生町尾岩の天満神社境内に建立されている常磐渠記碑と深い関係にあり、渠記碑文の原本や諸帳簿類とともに町内常磐井路土地改良組合で保管されている。

文化十三年（一八一六）から文政元年（一八一八）にかけて、同町（当時切畠村）細田、平井地域への灌漑用水確保のため切畠村大庄屋出納藤左衛門が藩の援助を受け私財を投じて築鑿した常磐井堤十七丁（約一八〇〇^坪）の工事の模様を伝える挿し絵入りの巻物の挿し絵の一つである。

岩を砕くため火を焚き水をかけて、ひびをやらせ少しづつ岩を削るという難工事の様子が画かれている。

過日現地に立って見たが、現在は改良が行われ、あるいは流路変更や道路工事などのため、当時の鑿の跡をとどめる箇所は見るができなかった。

（吉田 齊次郎）